

米西海岸のワイナリー所有は今やステータス

激しさを増す

カリフォルニアワイン争奪戦

海外レポート

ジャーナリスト 三木寛郎

米国建国よりも長い歴史誇る

1976年、かの有名な「パリスの審判」によって世界に名を馳せたカリフォルニアワイン。

「パリスの審判」とは、英国人ワイン商のステイヴン・スバリユアが、パリに開いたワインスクール「アカデミー・デュ・ヴァン」において開催されたイベントである。その背景にはスバ



カリフォルニアワインの中心、ナパ・バレー

リユアの片腕だった。パトリシア・ギャラガーという米国人女性がおり、さらにこの年は米国独立200周年に当たったことから、さまざまな記念イベントの一環として、カリフォルニアワインとフランスワインを目隠しで飲み比べようという企画が持ち上がったのである。

赤、白それぞれ10本ずつワインが用意されたが、フランス側は自分達が圧倒的に優位であるとの配慮から、米国産にハンディキャップを与えるべく、赤・白ともフランス4本対カリフォルニア6本という陣容で対決は行なわれた。

用意されたワインはブドウ品種を揃えるべく、赤はカベルネ・ソーヴィニヨン、白はシャルドネが指定された。必然的にフランス側は、ボルドーの赤と、ブルゴーニュの白。いずれもこの国が誇る名シャトーの逸品ぞろいだつた。1976年5月24日、会場とな

るパリ・インターコンチネンタル・ホテルのバティオで始まった試飲会で、まず「白」の順位が発表された。何と1位になったのは、シャトー・モンテレーナというカリフォルニア産のシャルドネだった。続いて行なわれた「赤」の部でも、1位に輝いたのはスタクス・リープ・ワイン・セラーズのカベルネ・ソーヴィニヨン。当時は全く無名だったカリフォルニアワインが、赤・白ともバタール・モンラッシェ、ムートン、オー・ブリーオンといった、フランス最高峰のワインを退けてしまったのである。

「パリスの審判」のニュースは世界中を駆け巡り、カリフォルニアワインのブームが起っただけでなく、世界のワイン市場が大変革を遂げ、いわゆる新大陸のワインが次々と名乗り出るようになるのだ。

「新大陸産」とは言え、カリフォルニアワインの歴史は実はかなり長い。

その創世は1769年、フランススコ派修道士達がサンディエゴに最初の伝道所を作り、聖餐用ワインのためにぶどう畑を拓いた時とされている。1840年代後半にはカリフォルニアにゴールドラッシュが起り、一攫千金を夢見る人々の流入によってサンフランシスコ周辺の人口は爆発的に増加した。

もちろん、ワインの需要も大幅に増加し、それまでプラムやアプリコットを栽培していた果樹園が、次々とぶどう畑に変わっていったのだ。

禁酒法時代には多くのワイナリーが廃業の憂き目にあったが、それでも個人の飲料用、礼拝用のワインの生産は認められており、ブドウの栽培もジュース用などとして生き残っていたことから、大恐慌や世界大戦を経て、今や名産地として名高いナパ・ソノマ周辺に多くの醸造家達が集まるようになり、ワイン自体の品質も



日本や韓国、中国の投資家も大金を注ぎ込んでいる

どんどん向上していった。

それでも1970年代中期までのカリフォルニアワインに対する大方の評価は「スクリーキャップの安価なワイン」というもので、なかなか高級レストランなどでは扱ってもらったことのないものだった。

その評価を一気に覆し、カリフォルニア、そして世界のワイン市場を一気に塗り替えたのが、前出の「パリスの審判」だったのである。

投資対象となったワイナリー

カリフォルニアワインの評価を一気に高めた「パリスの審判」以降、カリフォルニア、特にナバ・バレーやソ

ノマ周辺には名門と呼ばれるワイナリーが出現し、それまでフランス語でシャトーと呼ばれていた醸造所が世界的にも英語のワイナリーと名を変えていくようになった。

そうした時代の流れの中で、カリフォルニア州に対する世界の大手からの資本導入も進み、欧州そして日本からも多くの企業がこの地のワイン産業に進出して行った。

わけでも有名なのは、地元モンタヴィとフランス・ボルドーのフィリップ・ド・ロチルド男爵が設立したオーパス・ワンだろう。米国最高峰と言われる品質は世界でも人気である。

カリフォルニアワインの特徴の1つは生産量の少なさにある。フランスなど欧州では、1つのシャトーが年間数万ケースを生産する例が大半だが、こちらではほとんどのワイナリーが年間1万ケース以下という少量生産なのだ。

特異な例では、年間数100ケースというごく少量生産の「カルトワイン」と呼ばれるプレミアムワインも現れ、ネット上を中心に1本数10万円という高値で取引されている。

そうした状況下、多くの著名人もワイナリーのオーナーになっている。

ゴッドファーザーで知られる映画監督フランシス・フォード・コッポラは、1975年にナバの名門ニバム・エステートの一部を購入した。レーシングドライバのマリオ・アンドレッティもナバのワイナリーのオーナーの一人である。その他にも多くの著名人達がカリフォルニアのワイナリーを所有している。

最近ではアジアからの投資も多く、日本、韓国、中国出身の成功者たちが保有するワイナリーが出現して来ている。そうしたアジア出身のオーナー達が重視しているのが、母国のマーケットだと言う。

韓国系の実業家オーナーは米国内での小売は行なわれていないそうだが、中国系のワイナリーも中国国内にマーケットを絞った展開をしており、中国国内におけるワイン人口の増加と共に市場拡大を図る方針のようだ。カリフォルニアは地域的にもアジアの市場に近く、アジア出身の成功者達がナバやソノマを中心とするカリフォルニアのワイン生産に大きな影響を与える存在になることは間違いなさそうである。

これまでEUが大きな輸出先となっていたカリフォルニアワインは、これ

までも大きかった日本のマーケットに加え、中国、香港、韓国などアジア諸国への輸出が増えることが予測されている。

確かに、一時期は大きなブームとなったワイン投資という潮流も沈静化してしまったと見る向きもあるが、それはフランスのボルドーワインに限ったことであって、カリフォルニアワインには当てはまらないようだ。

しかしながらワインは基本的に農産物であり、2017年後半にカリフォルニアを襲った山火事のように自然災害の影響も受けるし、天候の変化にも左右される。さらに、出来のよい年とそうでない年では、市場価格に大きな変動が起きることも確かである。それでもワイナリーのオーナーになることに夢を抱く投資家が後を絶たないのは、そこに投資と言う以上の何かがあるからなのだろう。カリフォルニアに限った話ではないが、ジョニー・デップ、ブラッド・ピット、ステインク、デビッド・ベッカムなどは、個人用にブドウ畑やワイナリーを所有しているという。

ワイナリーへの投資やその所有は、成功者達のロマンあるステイタスシンボルとなっているのかもしれない。